

ルカ 2 章 25-38 節 「シメオンとアンナの恵み」

父ヨセフと母マリアは、その子の身代わりとなる供え物をして、捧げものをするために神殿にやって来ました。主の律法で定められたとおりのことをしました。つまり今日の個所は、神の子イエスは、私たちの生活するこの世界のただ中においでになられた、ということ。私たちと同じになられたということを表しているのです。

さて、その上で今日の個所には、二人の人物が登場します。その名も、シメオンとアンナ。アンナは 84 歳のおばあちゃんでした。彼女の名前には「恵み」という意味があります。しかし彼女の生涯は神様の「恵み」とはほど遠いものに思われます。彼女は若い頃結婚をして、七年間だけの結婚生活を送り、夫に先立たれてしまったとあります。60 年以上にわたって、神殿で神にお仕えする人となっていました。その彼女が、赤子のイエスを見ると、近づいて神を賛美したのです。「賛美した」とは、讃美歌を歌うだけでなく、神さまをほめたたえた、神さまに感謝をささげた、神さまに心からの喜びをささげた、という意味も含まれています。わたしたちは、何のために生まれたのか。それは、主なる神を賛美するためである(詩編102編)、と歌うのです。さっさと歩くことはできない。でも、それでも、感極まって、立ち上がり、マリアとヨセフに抱かれたイエスの方へ、近づいて行く。そして、赤子のイエスを見るや、思わず神を賛美しました。その喜びを、彼女は救いを待ち望む人々に伝える行つたと結ばれています。よぼよぼで、ただ神殿で祈り、断食するひとりの老婆。でも、そのおばあちゃんが、今日は違う。目がキラキラ輝いている。いつもより、足早にみんなのところに来てくる。そして「わたしたちの待ち望んでいた救い主が生まれたのだよ、いま、エルサレム神殿においでになったよ」と話し出しました。アンナは、おそらく祈りながら、真剣に日々、神さまと向かい合いながら、この日、はっきりと示されたのでしょうか。「この子が、救い主だよ」と。

もう一人はシメオン。彼もまた、信仰あつい人で、彼も神に祈り、また国民の幸せを願う普通の人でした。アンナ同様、祈り続けている人でした。しかも彼の場合、祈り続ける中で、ひとつの御告げを受けていました。「やがて現れる救い主、メシアにまみえるまでは、決して死なない」と。そしてこのシメオンも、マリアとヨセフに抱っこされてやって来た赤子のイエスを見て、「ああ、ついにその日が来た」と近寄ります。そして、彼は、両親の手からその子を自分の手に抱きます。彼は、祭司でも何でもありません、一般人です。そのシメオンが、その子を自分の腕に抱いて祝福し言いました。「もうわたしを去らせてくださるのですね」と。今の時代、多くの方が、安心を知りません。でも、救いを見た私たちは、安心して生きて行くことができます。この世界を大きく包む、神の愛を知っています。その愛によって救われることを知っています。その救いを見ました。「心配いらない。恐れるな。わたしはいつもあなたと共にいる。」といわれる主の愛を、永遠の愛を、永遠の命を知っています。だから、安心して生きることが出来る。地に足を付けて、そして、神を賛美しながら、生きることが出来ます。シメオンに言われた救い主を見るまでは、死を見ることがないというのは、実は、あなたは死を見るのではない、救い主を見る。自分の救いを見る。そう言われたことだったので。

私たちは、今、そこから始まった神様の豊かな恵み、大きな交わりの中にいます。シメオンとアンナが幼子キリストにしっかりとまなざしを向けて心を開き、祈ったように、私たちも新しい主の年2023年を歩みたいと願います。